慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「太宰帥大伴卿讃酒歌十三首」考
Sub Title	A treatise on the "San Shu Ka" of lord Otomo
Author	胡, 志昂(Hu, Zhi-ang)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1990
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.56, (1990. 1) ,p.27- 51
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00560001-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「太宰帥大伴卿讃酒歌十三首」考

胡　志　昂

一

太宰帥大伴卿、酒を讃むる歌十三首

① 験なき物を思はずは一坏の濁れる酒を飲むべくあるらし　（三三八）
② 酒の名を聖と負せし古の大き聖の言のよろしさ　（三三九）
③ 古の七の賢しき人達も欲りせしものは酒にしあるらし　（三四〇）
④ 賢しみと物いふよりは酒飲みて酔哭するし勝りたるらし　（三四一）
⑤ 言はむすべ為むすべ知らず極まりて貴きものは酒にしあるらし　（三四二）
⑥ なかなかに人とあらずは酒壺に成りにてしかも酒に染みなむ　（三四三）
⑦ あな醜賢しらをすと酒飲まぬ人をよく見ば猿にかも似む　（三四四）

⑧ 価なき寶といふとも一坏の濁れる酒にあに益さめやも　（三四五）
⑨ 夜光る玉といふとも酒飲みて情を遣るにあに若かめやも　（三四六）
⑩ 世の中の遊びの道に冷しくは酔哭するにあるべくあるらし　（三四七）
⑪ 今代にし楽しくあらば来む生には虫に鳥にもわれはなりなむ　（三四八）
⑫ 生者つひにも死ぬるものにあれば今代なる間は楽しくをあらな　（三四九）
⑬ 黙然をりて賢しらするは酔飲みて酔泣するになほ若かずけり　（三五〇）

萬葉集巻三に見える讃酒歌十三首は、大伴旅人歌にあっては勿論、集中でも最も注目を集める作品の一つである。これは、十三首という長大な短歌連作に盛り込まれた叙情の世界が記紀・万葉の中で他に類を見ない特異な性格を示すことと、そこに大陸文学の影響が濃厚に見られることとに深く関係する。

一体、万葉開花期、分けても対外交渉の門戸であった九州の都府歌壇においては、中国文学への傾斜が著しく、旅人と山上憶良はその中心となって、この時代を特徴付ける異色な作品を数々ものにした。二人の知識人の邂逅が互いに作歌を盛り上がらせる一つの刺激となり、漢風受容の場を形成したことは確かであった。しかし一方、旅人の作歌情熱を支えたものには、太宰府在任中の不如意な心境があったことも否めない。従って讃酒歌の特質を作歌における内面と外部との緊張関係のどの線に結びつけるかによって、作品に対する多様な理解が生まれてくる。例えば周囲の享受者との関係を作歌動機の第一義とするなら、「讃酒歌の狙う面白味の一つは和歌に漢風の表現を盛ることにあった」(1)というのも可能だが、逆に創作の基点をあくまで作者個人に置けば、十三首は「独自の境涯にあって自由に歌ふもの」(2)と

考えられてしかるべきであろう。いわば特定の文化層に共通する享受習慣への順応が作歌の常道であったとはいえ、個性的な創作は常に作者個人の体験と主体的表現を前提としなければならないのである。

そして、豊かな中国文学の教養と率直な主観的叙情を作歌の特色とする旅人にしてみれば、讃酒歌の特異な性格は、作品に注ぎ込んだ作者の心情が、むしろその教養に覆われた形で流れることにおいても現れている。故に十三首の真意を捉えるには作品に盛り込まれた漢籍知識の解明が不可欠な前提となる。

本稿では、讃酒歌を作者の主体的叙情の作品と捉え、旅人の内面を表現の基底に見通すことで、漢籍教養を生かした創作の技巧と作歌の意図について考えてみたい。そしてこれは、和歌における漢文学受容のあり方に新たな可能性を問うこと、つまり和歌の漢文学に対する受容が想像以上に柔軟で深いものであったことを探る試みにもなるはずである。

二

讃酒歌に織り込まれた数々の典拠ないし語句出典は、夙に契沖(代匠記)によって少なからず挙げられ、これが今日の研究に資するところ大きいことは贅言を要しない。現代では十三首を作品論からだけでなく、比較文学的見地から検証した考察もある(3)。こと創作傾向と表現特色につき、これまでの研究が既に大きな成果を挙げたといえる。だが、なお議論の残る問題がないわけではない。本節では、先学の既に指摘したこととの重複を避け、従来触れられていない作歌の定立する根拠を列挙しつつ、讃酒歌の意味を考えてゆきたい。

まず、⑧⑨二首について見る。各々に歌われた「価なき寶」「夜光る玉」は、周知の如く漢語的表現であり、従来これを俗世の最高の物的価値と解してきた。だが、漢籍では宝物をもって賢人英才を喩えることが多い。例えば

夫才生於世、世實須才。和氏之璧、焉得獨曜於郢握、夜光之珠、何得専玩於隋掌。天下之寳、當與天下共之。但分析之日、不能不悵恨耳。

――劉越石・答盧諶詩並書

右は『文選』贈答詩にある返簡の一節である。文中「和氏之璧」とは「卞和三献」(韓非子)や「完璧帰趙」(史記)といった有名な説話な史載で知られる天下の名宝で、正に「価なき寳」というのにふさわしい。書者はこれを「夜光之珠」と並挙して世の賢才を喩えたが、これに対する盧諶の贈書には「易曰、筆不尽言、言不尽意」といい、不遇の憂愁を訴えている。旅人は(報凶問歌)(七九三)を添えた書簡に、自らの悲痛な心情を「筆不尽言、古今所嘆」と同じ典拠によって表している。当時の文選の利用度から考えれば、これは盧書によった確率性が相当に高い。後の家持と池主の贈答書簡(三九三六―七五)が主としてこの盧・劉書簡(文選贈答詩に書簡付きなのは他にない)によったこともこれを裏付ける(4)。とすれば⑧⑨二首で「価なき寳」「夜光る玉」を併記したのも同じく劉書に拠ったものと考えられる。それに讃酒歌に俗世の無意味な価値として否定したのは、「験なき物を思」ふこと、「賢しみと物言ふ」こと、「なかなかに人とあ」ること、「賢しらをす」ること等いずれも観念的なものである。これらと照合すれば、この「価なき寳」「夜光る玉」も賢人英才を喩えたものと考えてほぼ間違いない。即ち二首の歌意は「無上の寳のような賢才があるというが、それも一坏の濁酒にどうして勝ることがあろうか」「夜光の玉のような英知があるというのが、それも酒を飲んで心を遣ることにどうして及ぶことがあろうか」と解すべきであろう。

してみると、これは②③二首で「古の大き聖の言」「七の賢しき人等」を飲酒においてのみ讃えたことと同値であると思われる。更に言えば、賢才英知があろうと飲酒に及ばないというのは、古の賢人達の境地を彷彿させるものでもある。竹林七賢の袖領阮籍についてみれば、

籍、本有濟世志、属魏晋之際、天下多故、名士少有全者。籍、由是不與世事、遂酣飲爲常。 ――晋書・阮籍傳

彼は本来自らの才能を政治に発揮する志を抱いていたが、世の中は魏晋王朝交替期に当たって変事が多く、権力に近づく名士で命を全うする者は稀であった。ゆえに阮籍は世事から身を引き、したたか酣飲に耽ったのである。彼はその〈詠懐詩〉第一首に「徘徊将何見、憂思獨傷心」と歌い、済世の才をもちながら酒に明け暮れる心中を吐露している。また飲酒にかけては阮籍にひけを取らぬ劉伶も、本伝によれば、

（劉伶）嘗爲建威將軍。泰始初對策、盛言無爲之化、時輩皆以高第得調、伶獨以無用罷。竟以壽終。 ――晋書・劉伶傳

という。時の輩が皆昇官をえたのに、対策に無為を説いた劉伶独り元の微官さえ失った。彼は〈酒徳頌〉において飲酒を「無思無慮、其楽陶陶」というが、それはあくまで俗悪な利欲や礼法に振り回される俗世に対していうものであって、乱世を生き、しかも自らを曲げないためには、いわば酒に沈む以外になかったのである。劉宋の顔延年が〈五君詠〉で劉伶を詠むのに「韜精日沈飲、誰知非荒宴」というのが、その本心をついている。こうした竹林七賢らの飲酒世界は、讃酒歌においてまず②③と⑧⑨との呼応によって大きく形取られているのである。

次に④⑤二首を見る。前一首で「賢しみ」に対して「酔泣」を賞賛する趣意につき、柳瀬喜代志氏は「酔泣」の典拠に絡めて阮籍らの故事を挙げて、その反俗性を論じている(5)。概ね首肯できる考察である。後一首の歌意については、鹿持雅澄が「いはむにもいふべきかたなく、せむにもすべき方しらず、至り極りて、ひとすじにいとも貴くめでたきも

のは、酒にて有らし」(古義)と解し、それが現在の通説になっている。かつて土屋文明氏はこの通説に対し、それでは「一首の内容が余りにも単純すぎ」る(私注)と疑問を呈じ、一首の大意を「言葉に言ふてだてもするてだても分らず行きつまった時に貴いものは酒であらう」と説いたが、『注釈』は、土屋氏の疑義を認めながらその解釈を無理だとした。爾後の諸注釈書はほとんど私注説を顧みなかったとみえる。が、小稿は土屋氏の解釈に賛成したい。というのは、集中その他古代文献に見える「いはむすべせむすべ知らず(に)」なる類型表現は、どうしようもない悲憂や困苦な境地を表すのに用いられ、前後にそうした状況に関連する表現が来るのが通常であって、その系譜に繋がる「すべなし」という表現も集中九十数例数えられる中、そう言った類型的表現習慣から外れる例はほとんどないからである(6)。従って続く「極まりて」の意味も人間存在の極限状態を表すものと考えられる。例えば

六極、一曰凶短折、二曰疾、三曰憂、四曰貧、五曰悪、六曰弱。 ――尚書・洪範・五福六極

書経には人間の不幸の極限状態として短命夭折、疾病、憂愁、貧困、醜悪、虚弱の六種を挙げ、それを「極」という。この意味で動詞に使われる場合、

今也為臣、(中略)有故而去、則君搏執之、又極之於所往。〔注:極者、悪而困之也。〕 ――孟子・離婁下

といい、

切切陰風暮、桑柘起寒煙。
悵望心已極、惝怳魂屡遷。 ――文選・謝玄暉・郡内登望

というふうに、人間存在の状況的または心境的な究極状態を表す。かかる「極まる」の意味・用法を、旅人はその教養からして当然知っていたはずである。それにたとえ自動詞形の「極まりて」を副詞的意味に取るにしても、下に係らず上に付くと見る方が、類型的表現の習慣に合うのみならず、語法的にも無理が少ない(7)。

そして、④が竹林七賢らの飲酒の反俗性を詠んでいることに照らし合わせると、⑤の趣意は、忘憂を含むその飲酒の韜晦性を擬えたものと思われる。乱世を生きた竹林七賢らにとって、飲酒の行為は一方に混沌とした世相に対する不満や憂愁を紛らし、人間の性情に反する偽善的礼法への反発から反俗性を誇示するものであったが、他方、それは険悪な世情と激動の世の中にあって身の安全を計るため、自らを韜晦する性格を強く帯びていた。再び阮籍について見れば、本伝では前引の一段に続いて

文帝初欲爲武帝求婚於籍、籍醉六十日、不得言而止。鍾會數以時事問之、欲因其可否而致之罪、皆以酣醉獲免。

——晋書・阮籍傳

という。当時未だ魏王朝の臣下であって魏の天下を乗っ取ろうとし、「司馬昭之心、路人皆知」と言われた晋の文帝が阮籍の娘を長男の嫁に欲した時、また鍾會が阮籍に罪を着せようとした時、彼は酒に酔い続け、酔い潰れることによって窮地を逃れたのである。それが政権交替の激動期を生き延びる一つの知恵でもあった。〈五君詠〉で顔延年が阮籍の飲酒を「沈酔似埋照」と詠んだのはこのためである。また同伝に次のような一節がある。

大將軍王敦命爲主簿、甚被知遇。(阮)裕以敦有不臣之心、乃終日酣觴、以酒廢職。敦謂裕非當世實才、徒有虛譽而已、出爲溧陽令、復以公事免官。由是得違敦難、論者以此貴之。

——晋書・阮籍傳

阮籍の同族子孫に当たる阮裕は、時の権力者王敦の知遇を得たが、異心を抱く彼から遠ざかるために終日酒に酔い潰れ、果してその難を免れたという。阮籍らの飲酒に共通することであったが、こうして正に言い様もしようもなく困り果てた時に、自らを酒に韜晦することを、時の「論者」が「以此貴之」と評価したところに、いわば竹林七賢らの飲酒行為に対する当時の受け止め方が端的に示されていると言えよう。よって「貴きものは酒にしあるらし」と続く一首は、そういった窮地に陥った時の心中を紛らし、自らを韜晦する酒の貴さを歌ったと考えて間違いないだろう。

更に⑥⑦二首について見ると、⑦に歌った「賢良(さかしら)」の意味相と、「猿」の寓意性について、従来様々な議論がなされてきた。これは実は『藝文類聚』等に引用がある阮籍の〈獮猴賦〉に拠って立ったのに違いない。

夫獮猴、(中略)體多似而匪類、貌乖殊而不純。外察慧而無度、故人面而獸身。性偏凌而干進、似韓非之囚秦。揚眉頞而驟眒、似巧言而僞眞。整衣冠而偉服、懐項羽之思歸。耽嗜慾而眄視、有長卿之研姿。沐蘭湯而滋穢、匪宋朝之媚人。終嗤弄而處泄、雖近習而不親。

——藝文類聚・獸部

同賦は阮籍集(日本見在書目録に阮嗣宗集五巻を著録)に全文収められている。右の一段は、猿の種種の醜態を並べ挙げ、韓非、項羽、司馬長卿といった史上の名人や、『論語』『詩経』等に見える美形の淫乱者宋朝、讒言をでっち上げ乱を起こす巧言者等を猿に擬えて風刺したものである。「あな醜賢しらをすと酒飲まぬ人をよく見ば猿にかも似む」という⑦の趣向がこれと同じであることは、一読して明白であろう。その上、この歌に初めて現れる「賢(さか)しら」という歌語は、集中憶良作の〔筑前国志賀白水郎十首〕(三八六〇―六九)に「情進」「情出」という表記で用いられた他に見当たらないのであるが、その特殊な表記も『類聚歌林』を編纂した憶良のことだから、同じく〈獮猴賦〉にある「性偏凌

而干進」の一句に拠ったものと考えてほぼ間違いない。従って「賢しら」には「外察慧而無度」といった意味相が考えられる。ちなみに〈獮猴賦〉の作意について、陳伯君氏は、これを魏末の皇族重臣の曹爽が政権を狙う司馬懿によって殺されたのを悲嘆し風刺したものと推測している(8)。なお詳考を要するが、阮籍の作品は、文選李善注にも言われたように、作者が乱朝に仕え、常に謗りにかかり災いに遭うことを恐れるゆえ、意は風刺にあれども文は隠微なるものが多い。従ってこの賦も時事を譏刺したものと考えてよいだろう。

では、「賢しら」を「猿」と罵倒した旅人の真意は何処にあったのか。それは、⑥で「なかなかに人とあらずは酒壺になりにてしかも酒に染みなむ」と自棄的に歌い、徹底的に酒に沈むことによって俗物への同調を拒否したことと同様、いやもっと痛烈に、「賢良」を振りかざし度を知らない時の輩への憤りと譏りがあったに違いないだろう。

このように、讃酒歌をそこに投影する竹林七賢分けても阮籍の文学・故事と重ねて見ると、「酔泣き」を賞賛し「賢しら」を否定し去ることを繰り返し歌う主想の底に、作者旅人の自暴自棄の気持ちと悲憤慷慨の情が容易に看取されよう。そして表現の背後にあった典拠の性格から、これは単に老荘の無為思想や竹林七賢らの脱俗への共感から発するものとは考えかねる。ならば讃酒歌に吐露しようとした作者の心中は、やはりそういった漢籍知識を借りずには明白に表現できない何かの事情に深く関わっただろうと強く予想されるのである。

三

讃酒歌の歌意そのものに対する理解に差があったせいだろうか、十三首の底流に作者の悲愁な心情を汲み取るにしても、それを作者の境遇のいずれに照準を合わせるかによって見解が分かれている。「妻を亡(ママ)った後の寂寥と長屋王の変

を耳にして一層深めた空寂虚脱感からの表白」(9)といい、「家庭的政治的な不如意からくる、放ち遣る術もない憂があった」(10)という概括的な見方も頷けるが、讃酒歌の作意を考えるには、やはり作歌の直接の動機を見分ける必要があろう。

神亀五年(七二八)の初め、九州に赴任してまもなく、旅人は連れ立って来た愛妻を旅の疲れがもとで失った。六十四歳にしてしかも「天離る鄙」で妻に先立たれた悲しさは想像するに余りあり、それが太宰府在任中の旅人に寂寥の感を抱かせたことは否めない。しかし巻三にみえる旅人の〔亡妻挽歌〕は、次のように歌っている。

神龜五年戊辰太宰帥大伴卿思戀故人歌三首

愛しき人の纏きてししきたへの吾が手枕を纏く人あらめや　(四三八)

右一首別去而經數旬作歌

帰るべく時は成りけり京師にて誰が袂をか吾が枕かむ　(四三九)

京なる荒れたる家に獨り寝ば旅に増さりて苦しかるべし　(四四〇)

右二首臨近向京之時作歌

歌中、亡妻への悲恋はよく汲み取れるが、それが讃酒歌に流れる悲愁と憤世の情と性格を異にすることは明白である。いわば亡くなった「愛しき人」を思う時「吾が手枕を纏く人」として哀傷する表現は旅人には別にあったのであって、自らを悲憤と自棄と韜晦の底に沈めるような讃酒の形を取る必要はなかったのである。従って十三首の主想を「亡妻悲哀」と見ること(11)には賛成しかねる。

ところが、翌天平元年の二月に長屋王事件が起きた。『続日本紀』を繙くと、二月十日中臣東人らが長屋王を密告し、その夜藤原宇合らが六衛府の兵を率いて王の家を囲み、翌十一日藤原武智麿が舎人親王、新田部親王、多治比池守らとともに王の宅に赴いてその罪を窮問、そして十二日に長屋王を自儘せしめたのである。それに連座した官人も七人いた。これは多くの先学の指摘どおり、前年九月に皇太子が薨じた後、その生母光明子の立皇后を巡り、皇親政権の執権者長屋王を目の上の瘤にしていた藤原氏兄弟の謀略による政変であった。同年三月藤原麻呂が従三位に進み、武智麿が旅人を抜いて大納言に昇任し議政官の班首となり、八月に光明子の立皇后を果たして、政権は完全に藤原氏の掌中に握られたのである。当時九州にいた旅人は史載には全く登場しないが、旧豪族大伴氏の首長として心情的には皇親政権に傾いていたであろうことは、神亀元年暮春三月作の〔吉野賛歌〕に

み吉野の　吉野の宮は　山からし　貴くあらし　水からし　清けくあらし　天地と　長く久しく　萬代に　變わらずあらむ　行幸の宮　(三一五)

と、聖武天皇登極時の宣命の表現を踏まえて、天武直系の新帝に対し白鳳政治への夢を託していることからも知られる(12)。従って、この事件から彼は大きな衝撃を受けたのみならず、中納言として政治の中枢にいただけに、報に接してすぐに事変の性質と自らの立場に対する判断がついたはずである。即ち、彼は必ずしも長屋王と密接な関係にあったとは思われないけれど、藤原氏のやり方に同調できない有力人物として政界から疎外される立場にあったのだということと、更には、神亀四年閏九月二十九日の藤原夫人の皇子出産及び同年十一月二日の異例の速さでの同皇子の立太子と前後する彼の太宰帥の任命は、長屋王の変に至る藤原氏謀略の一環としての疎遠策によるのだということを悟ったので

ある。とすれば、それを思い知った時の旅人の無念さと悲憤の情は、遠任による個人の不幸や哀愁も加わって、想像に絶するものがあったに違いない。しかも、長屋王は「私学左道、欲傾国家」という最悪の誣告を受け、聖武帝の勅命によって

忍戻昏凶、觸途則著、盡慝窮姦、頓陷疎網、苅夷姦黨、除滅賊悪
——續日本紀・天平元年二月十五日條

と断罪されたから、その無実を知りながら旅人の心中は、正に文字通り「言はむすべせむすべ知らず」というほかなかったのであろう。

してみると、讃酒歌に竹林七賢らの飲酒世界を呼び込んだのは、彼らが生きた政権交替の激動期と同様、長屋王の変が政治異変を意味するところに理由があったのではないか。そして、十三首に外部に叙述の根拠を置く推量表現「らし」を多く用いた意図も、事件に関わる心境表出の困難さに関連するだろうが、押えきれぬ悲憤と憂愁のため、旅人は結局、故事や典拠を多く用いる、いわば詠史・詠懐詩等によくある仮託・譏刺の手法により、飲酒に託して自らの心中を吐露するほかなかったのであろう。似たケースを一例挙げれば、

(劉)湛深恨(顔延年)焉、言於彭城王義康、出為永嘉太守。延之(字は延年)甚怨憤、乃作〈五君詠〉以述竹林七賢。(中略)蓋自序也。
——宋書・顔延之傳

顔延年が当時要任にあった劉湛に謀られて地方官に出されたのを怨み、竹林七賢を〈五君詠〉に述べて自らの怨憤を表したものである。かかる手法は詩人であれば勿論、虚構と仮託を知った万葉歌人にとっても未知のものではなかっただろう。

四

讃酒歌の意味・趣向と関連して、歌群の内容構成を把握することも作意の解明には必要である。十三首に一貫した構成が認められることは、山田孝雄氏（講義）が所見を提出して以来、稲岡耕二氏(13)、伊藤博氏(14)、五味智英氏(15)、清水克彦氏(16)等諸先学の論考により、既に讃酒歌の文学性を認識するに不可欠な論点となっている。小稿も第二節での考察を通して、讃酒歌に極めて精巧な構造があることを疑わない。しかし私見するところの連作構成は、従来の諸説とかなり異なる。

諸説を簡単に振り返ると、稲岡・伊藤両氏の構造論は、「酔泣き」または「賢しら」が詠み込まれた④⑦⑩⑬と総体的叙情を成す①とを謂ゆる支柱歌に据え、その間に二首一組ずつを配する形と見ている。更に稲岡氏は、②③・⑤⑥を序、支柱歌五首と⑧⑨を長歌、⑪⑫を反歌に相当すると考え、対して伊藤氏は、間に挟まれる四組が一種の起承転結の構造を取ると考えている。一方、謂ゆる支柱歌の有効性を認めながら、それが各々前に来る二首と三首で一組になるとし、第一首を独立するものと見るのが五味説であり、逆に支柱歌が後に続く二首と一組になると考え、最後一首を全体を締め括るとするのは清水説である。以上諸氏の論述に啓発を受けたこと少なくないが、疑問に思うところを簡単に言えば、即ち支柱歌及び組歌の認定ないし全体構造の定立の根拠が、奈辺にあったのか納得できないものがある。後に、広岡義隆氏(17)が新たに、①・②③④⑤・⑥⑦⑧⑨・⑩⑪⑫⑬でそれぞれ起承転結に当たるという説を立て、特に従来の諸論に対し、⑥と⑦との対応を強調したところは注目に価するが、全体としての構造論にはなお、起承転結の各部に歌数の不整合等の疑問が残る。

そこで私見するところの讃酒歌構造を述べると、十三首は互いに関連する三つの段落に分けられるものと考える。すなわち、第一段には①が独立する。これは、歌中に「酔泣」や「賢しら」なる歌語が見えず、謂ゆる支柱歌の他の四首と用語上明らかに違うのみではなく、歌の調べから言っても他の十二首の激しさに比べて穏やかさが感じられる。この相違を飲酒の名士をもって譬えれば、②以下は竹林七賢的であるのに対し、①は陶淵明の風格を思わせる。契沖が冒頭一首の「濁れる酒」の典拠に陶詩から「濁酒聊可適」一句を挙げたのは、或いはこのことを無意識的に感じ取ったのかもしれない。従って第一首は総体的叙情の一首として恐らく他の十二首ができてから、宴会の席上憶良の〈罷宴歌〉(三三七)を受けるべく即席に作られ(〈罷宴歌〉の意味については旅人歌五首と関連して別稿に譲る)、一連の冒頭に加えられたものと見たい。

次の第二段は②〜⑨の八首から成り立つ。初めの②③は『魏志』『晋書』等に見える徐邈や竹林七賢の故事を生の形で詠み込み、酒を聖賢と結び付けて歌い出すので、これは稲岡氏の指摘した如く序としての性格(これも第一首を独立させる理由になる)をもつが、八首中では歌い起こしの[起]に当たると思われる。これを受けて④⑤は、第二節で述べたように『晋書』や『世説新語』に見られる竹林七賢らの故事を暗に踏まえて、飲酒の反俗性や韜晦性すなわち酒徳を賞賛し、[承]にふさわしい二首であること明らかである。続く⑥⑦は、前一首では『琱玉集』等に見える鄭泉の飲酒に擬して徹底的に酒に沈むことによって、俗世に同調しない意思を表し、後一首では『藝文類聚』に引かれた阮籍の〈獼猴賦〉に拠って立ち、「外察慧而無度」といった偽善の「賢良」を罵倒する。二首は一正一反で共に酒に関わる一つの人生態度を表すことで共通し、前にあった酒の価値[起]、酒の徳用[承]を賞賛するものから一転して、飲酒に対する態度の表明となり、明らかに[転]を意識したものと思われる。そして⑧⑨は、「価無き寶」「夜光る玉」に賢人英才の意味を掛け

ることから[起]の二首と呼応しつつ、[転]に続いて、たとえ真に賢才があろうと飲酒に如くものかと強い詠嘆で一段をいったん結ぶ。これが[結]に当たることは言うを俟たないだろう。

更に、こうして二首一組ずつ起承転結の構成を取ると見られる八首の結句に注目すると、漢詩的構成と相応に、「サ・シ・シ・シ・ム・ム・モ・モ」という最終音の配列が詩の押韻法と全く一致することが分かる。ちなみに漢詩の押韻法では、上下二句を一聯とし、上の句が入韻すると一聯ごとに韻を転換することができるが、そうでない場合は二聯以上、下の句が同韻を踏まなければならない。例えば

A　青青河邊草。　綿綿思遠道。
B　遠道不可思。　夙昔夢見之。
C　夢見在我傍。　忽覺在他鄕。
D　他鄕各異縣。　輾轉不可見。
E　枯桑知天風。　海水知天寒。
F　入門各自媚。　誰肯相爲言。
G　客從遠方來。　遺我雙鯉魚。
H　呼兒烹鯉魚。　中有尺素書。
I　長跪讀素書。　書中竟何如。
J　上有加餐食。　下有長相憶。

——文選・古辭・飲馬長城窟行

右の楽府詩は、前八句（A～D）が上の句から韻に入るので一聯毎に転韻を行い、真中の二聯（E、F）では上の句が入韻せず下の句のみ同韻を踏んでいる。そして後八句は、第一聯（G）の上の句が韻に入らないから、下の句が第二聯

（H）のそれと同韻であるが、その上第二聯の上の句も韻に入るので、二聯中第一句を除く三句とも同韻の脚韻を踏むことになり、更に最後の二聯（I、J）では、いずれも上の句から入韻するので、二句一聯ずつ韻を換えている。讃酒歌で私見するところの第二段八首の脚音が、この後八句（G～J）の脚韻と寸分違わないこと明白であろう。

懐風藻詩人でもあった旅人が、かかる作詩の押韻法を知らないはずはない。漢詩的起承転結の構成に合わせて脚韻を短歌の連作に用いた例は、彼の他の作品にも見受けられる。同じく巻三にある〔大伴卿歌五首〕がそれである。その第一首（三三一）は讃酒歌と同様、宴会の席上小野老一首（三二八）と大伴四綱二首（三二九―三三〇）に答えたものであるが、続く四首は

吾が命も常にあらぬか昔見し象の小河を行きて見むため△　（三三二）
淺茅原つばらつばらに物思へば故りにし郷し思ほゆるかも。　（三三三）
忘れ草吾が紐に付く香具山の故りにし郷を忘れむがため△　（三三四）
吾が行きは久にはあらず夢のわだ瀬には成らずて淵にあらなも。　（三三五）

真中の二首が「思ほゆる」と「忘れむ」とで一転折を成し、結びの一首が歌い起こしの一首と呼応することで、起承転結の構成を形作る。その上、結句の最終音を「メ・モ・メ・モ」とし、隔首に同音を配することは、漢詩の隔句押韻法と完璧に符合する。『懐風藻』に収められた旅人の漢詩〈初春侍宴〉でも、

寛政情既遠、迪古道惟新。
穆穆四門客、濟濟三徳人。

梅雪亂殘岸、煙霞接早春。
共遊聖主澤、同賀擊壤仁。

と、隔句押韻法を用いている。八句四聯で起承転結の構成を形作ったその詩作は、同作者の短歌連作の構造を考える時に、無視し得ぬ資料となるであろう。

しかれば、残り⑩〜⑬四首は第三段になるが、十三首に続く満誓の歌(三五一)が主に⑩以下三首をうけるので、ここに一つの折り目があったことは明らかであろう。そしてこの真中二首は、ペアとなるべく表現上の対応が見られ、外側二首にも「酔泣」なる用語と結句助辞の呼応が認められる。いわばこれは、渡瀬昌忠氏(18)が人麻呂歌四首(四九六—九)に対して指摘した[波紋型]構成と似ており、旅人歌では前に挙げた四首(三三二—五)に見た[吉野・飛鳥・飛鳥・吉野]の形に近い。ただこの四首は独立した構成を強く意識して作ったというより、むしろ前八首に付随する部分として成り立ったと思われる。すなわち⑩は、歌群冒頭に集中して現れた「らし」を再び結句に用いて[承]の二首と対応し、「酔泣」の繰り返しや「極まりて」と「冷しくは」との意味上の共通性のほか、共に阮籍の故事を踏まえたこと(後述)でも繋がる。次に⑪は、[転]の二首と照応するが、これは結句の助辞が同じだけでなく、いわば現世の徳行をすべて拒否することにおいて結び付き、しかも「酒壺に成り」「猿に似る」「虫に鳥にも成りなむ」といった比喩的、化生説的表現はこの三首以外にないことから知られるのである。更に⑫は、「あらな」という強い希求表現が⑧⑨の「めやも」という強烈な反語表現と呼応し、それに「生者つひにも死ぬるものにあれば」といい、内容上⑧⑨を歌った理由の付け加えとなる様相を呈ずる。そして最後に⑬は、「けり」という熟考を経た詠歎の助辞で本段の第一首ひいては前八首中、讃酒歌の内容を具体的に展開する④と最もよく対応し、全体を締め括ったのである。以上の私見を図に示すと、次の表のよ

	構成・意味	結句・脚音
①	起・讃酒価値	飲むべくあるらし
②（長歌）	起・讃酒価値	言のよろしさ
③（長歌）	起・讃酒価値	酒にしあるらし。
④（長歌）	承・酒徳賞賛	勝りたるらし。
⑤（長歌）	承・酒徳賞賛	酒にしあるらし。
⑥（長歌）	転・態度表明	酒に染みなむ。
⑦（長歌）	転・態度表明	猿にかも似む。
⑧（長歌）	結・讃酒価値	あにまさめやも。
⑨（長歌）	結・讃酒価値	あにしかめやも。
⑩（反歌）		あるべくあるらし
⑪（反歌）		われはなりなむ
⑫（反歌）		楽しくをあらな
⑬（反歌）		なほしかずけり

うになる。

このように、讃酒歌十三首の構成分けても八首に対する四首の反復・照応関係を見ると、それが長歌に対する反歌の如き相互関係を強く意識したことは明白に看取される。既に稲岡氏が十三首は長歌、反歌に相当するものを含むと指摘しており、これは万葉和歌史的見地からする的確な把握というべきであるが、構造に即していえば、長・反歌それぞれに相当する部分のしかるべき位置を見定めることも当然必要であろう。

とすれば、人麻呂の長・短歌例えば〔安騎野従猟歌〕(四五—九)とも見合うような連作構成を、ここに見ることができるのである(19)。しかも長歌に比べてとかく分散し易い短歌の連結を、旅人は漢詩的起承転結の構成と整然たる脚韻とをもって補強し、人麻呂が既に意図したという短歌連作を一層発展せしめ、極めて巧みで緻密な構造を有する短歌連作を和歌文学の世界に現出させたといえよう。

五

さて、讃酒歌の構造を以上の如く把握すれば、第二節で考察したいわば長歌に相当する八首に続く反歌として、従ってより作者の心情に密接したはずの四首の趣意も明らかになってくる。

例えば、⑩について見ると、この歌は周知の通り、「冷」の訓が定まらないことで説が分かれているが、前部との関連から「すずしくは」と訓じ、意味を「寂しく荒涼たる」とする古典大系説に従うべきだろう。「冷」をこの意味に使うことは、実は同時代の漢詩文にもあった。例えば藤原万里の〈仲秋釈奠〉(懐風藻)に「運冷時窮蔡、吾衰久嘆周」というのは、諸国遊説中蔡の地で窮地に陥った孔子の運勢の寂しさを「冷」で表現したものである。思えば、これを誤字とし「たのしき」と訓ずる説は、その前に来た「遊びの道」に引かれての解釈だが、そもそも「遊」を単に「遊といふは歌舞、管弦はさらなり、漁猟また酒宴など」(攷証)と遊楽に解釈したこと自体、誤解の要素を含んでいる。もっとも集中及び懐風藻の「遊」が多くの場合宴遊を表すことは疑いない。しかし官僚貴族社会においての宴遊は、公私にかかわらず、官界での交遊など政治的意味を帯びることが多かった。それは、かの長屋王邸の詩宴が文治政策の一環でもあったことを思えば分かる。例えば宇合の〈秋日於左僕射長王宅宴〉に「遨遊已得攀龍鳳、大隠何用覓仙場」といい、宴遊を通じて既に貴人(龍鳳)の知遇を得たことを歌っている。また旅人自身の侍宴詩でも「共遊聖主澤」といい、宴遊にかけながら官人として聖主の恩澤に優遊する意味に「遊」を用いているのである。更に不比等詩〈元日応詔〉に「感徳遊天澤、飲和惟聖塵」とある「遊」は、既に宴遊の意味から離れ、文選詩に見る「優遊省闥」(潘岳・為賈謐作贈陸機)、「薄遊第従告」(謝玄暉・休沐重還道中)、「羈旅遠遊宦」(陸機・赴洛)等といった出世任官の意味に傾いている。そして、句中の

「道」も『注釈』の指摘通り漢語の訓読表現であれば、「遊びの道」(遊道)の一句が「君子遊道(李善注：史記曰、陳平遊道日廣)」(文選・楊子幼・報孫會宗書)といった漢語の訓読を意図したことは明白であろう。

振り返って阮籍らを見ると、

(阮籍)時率意獨駕、不由徑路、車迹所窮輒慟哭而反。

——晋書・阮籍傳

道に行き詰まって慟哭するという彼の奇矯な行為は、自らの「済世志」が乱世に用いられる道のない悲愁を寓意したのである。その〈詠懐詩〉に「失路将如何」といい、また顔延年詩に「途窮能無慟」といい、陶淵明〈飲酒二十首〉に「失道向千載」というなど、これら飲酒の名人達は、いずれも遊すべき道を失った憂欝な心境にあって、彼らの自由闊達な振舞いと表裏を為すのである。従って「らし」をもって彼らの世界に叙情の根拠を求め、「遊びの道に冷しくは酔泣きするにあるべくある」と歌ったのは、穏やかならぬ世の中にあって、官界の旁流として疎外される自らの失意と消沈を「酔泣」することにほかならなかったと言ってよい。

故に、続く⑪⑫では「今世にし楽しくあらば」「今世なる間は楽しくをあらな」と欝屈な心境からやけになって快楽を求めたのである。二首とも酒に触れていないので、前部との関連によって読むべきことを示唆していよう。すると⑥⑦と照合すれば、「来む世には虫に鳥にも我はなりなむ」という底に、旅人の自棄と憤世の気持ちが深く裏打ちされていることは、容易に読み取れる。また⑧⑨の「価なき宝」「夜光る玉」が賢人英才を喩えたことで、「生ける者つひにも死ぬるものにあれば」という人生無常の一般観念に、具体的事象を想定すれば、風雅を愛し文才を有する長屋王の死が大きく浮かび上がるだろう。もっとも人生無常から束の間の快楽を求める発想は、辰巳正明氏(20)の指摘通り中国詩にも

あり、作者がそれを意識したことは確かであろう。だが「酔泣」をもって繰り返し塗り込めた無常の悲嘆となれば、性格が違ってくるはずである。愛妻を失って間もなく親類の凶報が畳み掛けてきた時、旅人は

世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり　(七九三)

という無常感が身に染み入るような名唱を作っている。また長屋王と同時に自尽させられた膳部王を悲傷した作者未詳歌も

世間は空しきものとあらむとぞこの照る月は満闕しける　(四四二)

と、同様に世間無常の悲嘆から歌っている。万葉歌における無常感のこうした定着の状況から、⑫にも具体的な人物の死を想定してよいだろう。そして第二節で見た作者の憤世的で自棄な気持ちを思い出せば、これはやはり長屋王の不時の死を置いてほかに考えられない。

だからこそ、最後に⑬で「賢しら」否定と「酔泣」肯定という全体の主題を繰り返しながら、主として④と照応し熟考した形で「黙然をる」ことを否定したのである。この初句の表現を、旅人は房前宛の書簡(八一〇―一一)でも「慨然として止黙をることを得ず」と感慨至極の心情を表すのに用いている。従ってこの一首は、利口そうに沈黙してはいられず、といって、また如何とも言いようも為ようもない心情を、「酔泣」に託して吐露することの意思表明であるに違いない。いわば讃酒歌の創作意図がすべてここに集結されてくるのである。

久松潜一氏(21)は、旅人を取り立てて「連作歌人」と称した時、讃酒歌十三首にふれ、「一首ずつはなして見るとやや

浅い感じがするがこれをまとめて見ると互いにひきたって来る」といい、「まとまった一連となっているためにすぐれた効果をあげているのである」と述べた。叙事や思想の盛り易い長歌に対し、叙情を本領とする短歌の連作は、正に一首一首の独立と連続の故に、一筋に表現できない心情の吐露に最も適した形式である。そして前述した讃酒歌の構成に基づき、表現の基底に用いられた漢籍知識や作歌の手法を通して十三首を捉えると、当時の官界にいた大伴旅人の立場と心境をかなり具体的に伺うことができると共に、明言出来ない複雑な叙情の必要に応じての、極めて緻密な技巧と密度の濃い内容を有する優れた文学作品の誕生を跡付けることもできるのである。

六

以上で讃酒歌十三首自体に関する考察を終える。最後に、かかる性格をもつ讃酒歌十三首は、万葉和歌の流れの中でどう位置づけられるか、付記しておきたい。

記載言語の客観性・自立性の獲得による、表現意識を伴う和歌の成熟を万葉第二期において見るならば、人麻呂歌が天武・持統朝における礼・楽の草創と整備との過程に重なる形で出現したことは一つの必然性を含む。即ち人麻呂歌中でも公的性格をもつその作歌は、たとえば〔吉野賛歌〕(三六—九)に見る天皇即神思想や、〔高市挽歌〕(一九九—二〇一)における王権の神聖化への志向など、特に持統朝の時代精神を担って歌ったと見られるが、そもそも呪言から発生した歌のもつ、共同体生活を規範する実用的性格から、謂ゆる「前記載」的な初期万葉を経て、王権の強化と上昇を明確に志向する祭式・礼楽の整備という当代の政治的な目的に向けての文化的統合において、宮廷歌人としての人麻呂歌の成立基盤を捉えることも可能であろう。そして奈良朝以降、歌人の個性化が進む中で、人麻呂作歌の内包する政治的一面

は、むしろ憶良と旅人において新たな展開を見せるといってよい。たとえば憶良の〔惑へる情を反せしむる歌〕(八〇〇―〇一)や〔貧窮問答歌〕(八九二―三)等は、当時の社会状況と令に定められた国守としての政務上の立場とに噛み合いつつ、儒教の教理に基づき善政を求めるところに、創作の意図が認められる。また旅人の〔吉野賛歌〕(三一五―六)の踏まえた宣命の表現には、中務卿という律令官人としての立場と政権への嘱望が伺え、それは九州赴任当初、太宰少弐石川足人に答えた〔帥大伴卿和ふる歌一首〕(九五六)に見る太宰府長官としての政治感覚に通じるものがあったであろう。こうしたいわば、中国文学の根強い体質の一部分――即ち政治と癒着する文学――と似たような状況を、二人の教養と時代の要請によって和歌文学に顕現せしめた中で、卑族出身の憶良が中級官吏として朝廷と民衆との両様の立場において歌ったと同様、貴族高官の旅人は、官界での失意にあった場合、官人意識が強かっただけに逆に憤世と自棄の形で歌ったことも極めて自然な成行きであると思われる。ここに旅人と憶良を中心とする九州歌壇において讃酒歌の現出する文学的状況があったであろう。そして政治に関わる文学の、官人としての失意に伴う個の強烈な自意識によってのみ到達しうる一つの境地、すなわち為政者に対する反発の姿勢とその文学的達成を旅人の讃酒歌十三首に見ることができるのである。

無論、このような性格をもつ作歌は日本上代文学に類を見ないが、中国文学との交流が盛んだった時代の流れに既にその出現の条件が用意されていたのである。ここに伝統を受けつつも時流の先端を行く讃酒歌の特質があったといえよう。そして、万葉集をその題材・内容・修辞・技巧の豊富多彩さにおいて評価するならば、讃酒歌十三首は、漢籍知識を有効に用いた作歌手法と短歌連作としての巧みな構造と共に、以上のような政治的性格においてしかるべき評価を受けるべきであろう。

【注】

（1）村田正博「大伴旅人讃酒歌十三首」（『万葉集を学ぶ』第三集）

（2）武田祐吉「大伴旅人」（『国文学研究・万葉集篇』）

（3）中西進『万葉集の比較文学的研究』

（4）古沢未知男『漢詩文引用より見た・万葉集の研究』参照。

（5）「旅人の讃酒歌に見える【酔泣（哭）】について」（『国文学研究』五〇集）は、阮籍が母の葬礼に際して、肉を食い酒を飲んで号泣し、血を吐いた故事等を挙げ、三四一番歌の典拠としている。これには首肯できるが、その時の阮籍の奇矯な行為が反礼教的な意図を強く帯びることにも注目すべきであろう。

（6）古代文献に見えるこの表現は、例えば尼理願の死去を悲嘆する大伴坂上郎女の挽歌に「…晩闇と　隠りましぬれ　言はむすべ為むすべ知らに　徘徊り　ただ独して　白細の　衣手干さず　嘆きつつ　わが泣く涙　有間山　雲居棚引き　雨に降りきや」（四六〇）といい、藤原永手を弔問する宣命に「…忽に朕が朝を離りて罷りましぬれば、言はむ術もなく為む術も知らに、悔しび賜ひ詫び賜ひ大坐し坐す…」（続日本紀・第五十一詔）というように、いずれも言い様のない悲哀と苦痛な状況を表すのに用いられている。なお「すべなし」表現の性格については、金井清一「「すべなし」と歌うことは」（『論集上代文学』第二・三集）参照。

（7）小島憲之（『上代日本文学と中国文学・中』）は、「極まりて貴き」を漢語「極貴」の訓読表現としたが、現訓では語法的に無理があろう。例えば文選から例を挙げれば「智窮罪極」（司馬遷・報任少卿書）「窮凶極虐」（任彦昇・宣徳皇后令）といった如く、自動詞形と他動詞形とでは修飾する対象が違う。

（8）『阮籍集校注』

（9）高崎正秀「大伴旅人」（『上古の歌人』）

（10）五味智英「万葉集」（『古代和歌』）

（11）鮫島正英「讃酒歌の性格を考える—二・三の語法を通して—」（『論集上代文学』第八集）

（12）大浜厳比古「歌人誕生【旅人覚書その一】」（『山の辺の道』昭三九・一）

（13）『憶良・旅人私記—讃酒歌の構成をめぐって—』（『国語と国文学』昭三四・六）

(14)「古代の歌壇」(『万葉集の表現と方法・下』)

(15)「讃酒歌」(『万葉集の作家と作品』)

(16)「讃酒歌の構造と性格」(『万葉論集・第二』)

(17)「讃酒歌の構成について」(『三重大学教育学部研究紀要』昭五八)

(18)「人麻呂における贈答歌」(美夫君志』昭五八・十二)

(19)【安騎野従猟歌】の短歌四首も結句の最終音に「ニ・シ・ヌ・フ」という同韻・転韻関係が見られ、また渡瀬氏の挙げた人麿歌四首も隔首同音の関係が最終音に認められる。但し、これは人麿の意図する所なのかどうか、判断しにくい。

(20)「讃酒歌の構成と主題」(『万葉集と中国文学』)

(21)「連作歌人としての大伴旅人」(『万葉集と上代文学』)